

4. 須可麻神社・麻気神社の建築

安部 萌花・宮田 匡

本稿では、福井県三方郡美浜町菅浜区の須可麻神社・麻気神社の建造物調査の成果を報告する。須可麻神社・麻気神社ともにこれまで調査は実施されていない。今後の保存・活用のための基礎的資料とすべく建築調査（実測調査）を実施した。

須可麻神社・麻気神社 一間社流造 柿葺
 明治後期 1975年（昭和50）改築
 身舎円柱 切目長押 腰長押 内法長押 頭貫
 連三斗 実肘木 二軒繁垂木 妻飾虹梁太瓶束
 庇角柱 頭貫 木鼻 連三斗 杵肘木 実肘木
 一軒繁垂木 三方切目縁 木階七級

須可麻神社・麻気神社は美浜町菅浜区の東部に位置する。若狭国神名帳・「若狭国神階記」に「正五位菅竈明神」と記されている神社が、当社に該当すると考えられる。現在は覆屋の中に両社が並び建つ（図1）。左側が須可麻神社（図2、写真1）で、右側が麻気神社（図3）である。

両社は一間社流造の柿葺の建物で、規模、意匠が同一である。明治後期に地区の神社が当社と合祀された際に一緒に造営されたと考えられる。以下の解説は両社に共通する。

身舎には正面に板扉を設け、内部に宮殿を置く。天井は鏡天井である。柱は円柱で、切目長押・内法長押・頭貫で固め、組物を置く。身舎小壁には波や龍の彫刻が入る。

庇は角柱で、頭貫木鼻と中備の墓股のみ彩色を施す。木鼻は象鼻で、墓股の彫刻はそれぞれ目・耳・口を隠す3匹の猿、いわゆる「三猿」である。

身舎と庇は海老虹梁で繋ぐ。この海老虹梁のつなぎ方が独特で、身舎側では内法長押の下端に肘木を挿しその上に斗を置いて海老虹梁を受



写真1 須可麻神社全景



写真2 麻気神社身舎組物詳細



写真3 麻気神社庇部分見返し（組物詳細）

けている(写真2)。一方、庇側では梁間側に入る庇・組物の実肘木と一体となっている(写真3)。これらは他の神社建築ではあまり見られない珍しい点である。海老虹梁の絵様は身舎側のみ猪目の彫刻を施す。

建設年代を示す史料はないが、麻気神社は1908年(明治41)に合祀されたものと伝わる。須可麻神社には広峰社、塩竈社が合祀されている。このような明治期の神社の動向と建物の風蝕などから、明治後期の建設とみておきたい。

当地区の近代の神社の合祀の状況がわかる重要な遺構である。また、いずれの神社も菅浜区で大事に祀られつづけている点も重要である。今後も一体で保存・活用されることが望ましい。

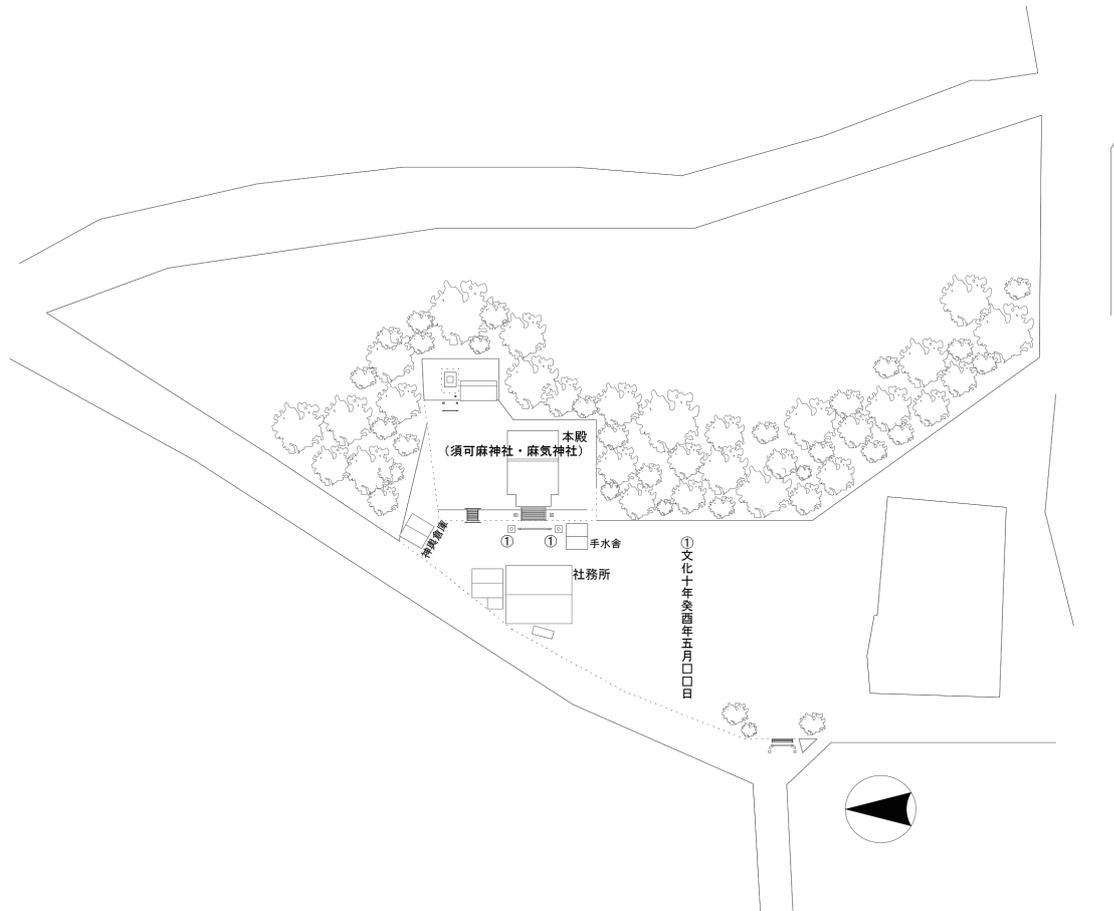


図1 須可麻神社・麻気神社境内配置図

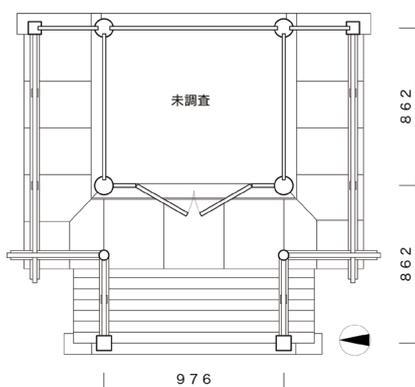


図2 須可麻神社平面図

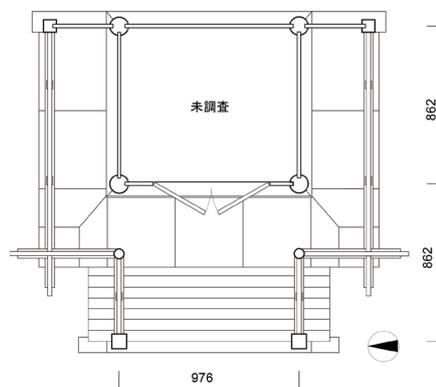


図3 麻気神社平面図